■図書紹介■

井田仁康著

『ラブリー　ニュージーランド　ー自然と人間の生活ー』

二宮書店，1996年，201頁，1800円

山　田　義　尚*

南半球に浮かぶ島国，ニュージーランドは近年日本人の海外旅行先としての人気が急上昇している地域である。現在では年間に約15万人もの日本人がニュージーランドを訪れるという。その理由としては，この国の中心である北島と南島を合わせても日本の面積の約７割という小さな島国でありながら，氷河や火山活動によって造られた雄大な自然景観への憧れ，人口の20倍はいるといわれるこの国のシンボル，羊。そのような環境によって形成されたのであろう素朴な国民性etc …。加えて，地理的位置を日本と比較すると，緯度的には赤道を対象としてほぼ同じ，経度的に見ても約40度，時差にして３時間と海外旅行当初に頭を悩ます「時差ボケ」もほとんど心配いらない所にも，人気の理由があるのかも知れない。

ところで，このようなニュージーランド人気の上昇とは反対に，ニュージーランドのことを紹介した書物がまだ数多く世にでていないのはご存じの通りである。観光を目的とした渡航者が最も多く手にする旅行ガイドブックについては種類もそれほど多くなく，場合によっては海を隔てた隣国のオーストラリアの付録のように記載されている場合もある。ましてや，旅行記なるものも数少なく，自然，社会環境をまとめて記載した地誌書についてはほとんど存在しない状況である。このようなことから，本書の持つ意義は極めて高いものがあると言えるのではないか。

本書は，1993年９月から1994年７月初めの約10ケ月の間，著者が文部省在外研究員として南島クライストチャーチにあるカンタベリー大学地理学教室に留学したときの種々多様な生活体験を基に書かれたものである。目次より窺うことのできる本書の章構成は以下の通りである。

Ⅰ　ニュージーランドへ　ープロローグー
Ⅱ　クライストチャーチ　ー南島最大の理想都市ー
Ⅲ　クライストチャーチ周辺　ー自然を楽しむー
Ⅳ　カンタベリー平野　ー羊の国ー
Ⅴ　カイコウラ　ー漁業，クレイフィッシューー
Ⅵ　マウント・クック　ーニュージーランド最高峰の山，人気の観光地ー
Ⅶ　テ・アナウ，ミルフォード・サウンド　ーフィヨルド，多雨地帯ー
Ⅷ　フランツ・ジョセフ氷河，フォックス氷河　ー氷河の道ー
Ⅸ　ダニーデン，インヴァーカーゴ，ブラフ　ー南の都市，動物保護ー
Ⅹ　ニュージーランドの教育・日本との関係

これだけ見ると，特徴ある地域を写真を中心に紹介しただけの極めて主観的な旅行体験記に過ぎないのではと思われがちであるが，読み進めていくうちに，筆者の意図はそこに留まっていな

* 沖縄県立北中城高等学校

いことがわかる。それは，実に34の図や表などの統計資料を随所に用いることや筆者独自の現地調査によるオリジナル資料などによって，現地での生活体験から生じた疑問の裏付けがなされており，客観的にもニュージーランドを知ってもらうことをねらいとしているのである。それを示す方法としても，専門的地誌書に見られるようなニュージーランドの地形とか，〜の気候，農業といった系統的項目での記述を避け，行く先で疑問に思ったことをあたかも近くにこれまた極めて優秀なガイドがいて，統計資料を提示し客観的に納得させてくれる記述形式となっている。つまり，本書は単なる旅行体験記どころか，内容としては旅行ガイドブックとして，また，専門的地誌書としての役割も持った総合的な本として位置づけることができる。

さて，内容の展開については前述の章立てからもわかるように，ニュージーランド南島の各地方を紹介する形となっている。各章の初めにおいては生活体験に基づいた，現地の人々との関わりの中で生じたエピソードを記述し，その後各地方の旅行記を展開する形式をとっている。しかし，その中でも雄大な自然を旅する道中において，現地人とのふれあいが至るところに詳細に記載されている。農道で車がスタックし現地人に救援されながらも，あまりの人の少なさに感慨深くなったこと，氷河の遊覧飛行での現地ガイドとのやりとり等がその例としてあげることができる。また，家族同伴（妻とこども３人）での現地での生活が筆者のみでは決して経験しうる事のできない内容も随所に記載されている。例えば，複数の家族を紹介したパーティーで，女性が一通り料理をとり席に戻って食べるころに，男性が立ち上がり料理を取りにいくという，いわゆるレディーファーストに対する衝撃は，家族連れでなければその衝撃も半減したであろう。また，著者の長女の通った幼稚園では健常児と精神障害児がともに学び，お互いを理解し助け合うことを知ること，長男の通った小学校における小人数指導の授業の様子から窺うことのできたニュージーランドのこども達の考え方など，家族同伴でなければ知るきっかけさえもない事が本書の中で数多く詳細に記載されている。

このように，本書には多層にわたるニュージーランド人が登場するが，サブタイトルに「自然と人間との生活」とあるように，現地人が自分達の住んでいる土地をどのように考え，行動しなければならないかということが多く記載されている。特に本書の第Ｘ章「ニュージーランドの教育・日本との関係」の中で，クライストチャーチの高校生５５８人に質問紙調査での結果に如実に現れている。質問内容は「ニュージーランドのどこを日本にアピールしたいか」というもので，半数以上が「環境の良さ」，２位には「人の良さ」となっている。つまり，自然環境のすばらしさを知り，それを大事にしなければいけない心を持っているのが，著者の認識したニュージーランド人であったのであろう。筆者は常々，学校の地理にはどうして人間臭さが薄くなりがちで，どうにか対処できないものかと考えていた。現在，我が国の高校の地理教育の目標には「世界の人々の生活・文化に関する地域的特色とその動向を，自然環境および社会環境と関連づけて理解させ…」とある。この点で本書の刊行は，ニュージーランドという地域を教材化するときの大きな役割も持っているといえる。ただ，まえがきにもあるように，短い10ケ月という期間の中で，そのような人々とともに過ごし，感じたことを広く一般の人々にも知ってもらいたいことが，著者の本当のねらいであった。このことから，本書は地理教育に携わる人に限らず，ニュージーランドに憧れを抱く多くの人々に読んでもらいたい，貴重な一冊であるといえる。